

うきたむ

第5号

1995. 5. 15

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

(山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL 0238-52-2585)



押出遺跡の復元住居内に設けられたジオラマ — 5500年前の家族の暮らし

縄文人の祈り

本館運営協議会委員

安彦好重

本館展示の舟形町西の前出土の土偶を見て、敬けんな念いに心を打たれた。日本最大の土偶ということもさることながら、その姿は静謐な祈りのポーズである。

顔をやや天に向け、両腕は肘で曲げて、胸前で指を組んでいる。腹は前に突き出し、臀部は後ろにひいて、裾幅広いズボン状の裳をつけた丈長ですらりとした両足はきちんと揃え、膝をぴんと伸ばした姿勢は、今にも腰を曲げて深々と礼拝しそうな動きが感じられる。動の前の静の無心の姿で、ただ一心に祈りを捧げている。

彼女は一体何を祈っているのでしょうか。朝から獵に出てまだ帰らない夫の無事を祈っているのでしょうか。

それとも、森羅万象の神恩に感謝を捧げているのだろうか。

あるいは、わが胎内で胎動しはじめたわが児の健やかな安産を祈っているのだろうか。

「いのり」というのは「齋き宣る」ことで、神をまつり、崇めの心をもって、見えざる神へ告げる無言の希いである。

この美しく、うら若い、現代的ともいえる縄文聖女の祈りは、今も、そしてこれからも永遠に続くであろう。

(西の前土偶写真は次の頁に)

「よみがえる縄文文化」

県内出土の優品を一堂に 開館三周年記念特別展

いま縄文文化が人々の関心をあつめていく。それが日本人の深層を形成する文化であるのみならず、現代文明のすすむ方向に、何らかの警告と示唆を暗示するからである。開館三周年を記念して「よみがえる縄文文化」展を開いている。自然と共生して豊かな文化を築きあげた縄文人の息づかいにじつと耳を傾けてみようではないか。

大きく、美しく、珍しいもの

この度の展示資料は、県内各地から出土した縄文時代の遺物のなかで、もっとも大きなもの、もっとも美しいもの、もっとも珍しいものを選んだ。大小21品を数え、32遺跡からの出土品である。これを12の各機関や個人から借り受けることができた。

それらを「縄文時代の幕開け」「縄文文化の展開」「縄文文化の終末」

の最盛期」の四つのテーマのもと、ほぼ時期別に古い方から順に展示してある。

大きいものでは、県内最大の最上町水木田の縄文中期土器群が並び、美しいものでは何といっても舟形町西の前の土偶がメインであろう。その美しいフ



西の前遺跡の土偶（高さ45cm）
（財）山形県埋蔵文化財センター保管

ームは絶妙であり、日本で最大の土偶でもある。

珍しいものでは、高島町日向出土最古の土器や石器、村山市宮の前遺跡の赤色顔料入土器、人面付土器、羽黒町玉川出土のひすい製の玉類、庄内出土の文様のある巨大な石棒、寒河江市柴橋から発見された熊の土製品、遊佐町三崎山でみつかった青銅刀などがある。

縄文文化の粋

これらの展示資料は、いずれも縄文文化の粋を示すもので、一万年の間東北に栄えた文化がすぐれたものであったことが容易にわかるであろう。

三崎山の青銅刀などは、縄文後期に日本海をへだてた中国との交流があり、もたらされたとの説がある。晩期の呪術的な磨製石器、例えば石刀や石剣などは金属器を模倣したものとしたかいいようがない。

羽黒町玉川遺跡からは、玉を磨いた砥石とともにかなりの量の「ひすい」（硬玉）製の玉類が発見されている。ひすいの国内の原産地は、唯一新潟県南部の糸魚川市の奥にある。これらをも、その当時意外に遠い地域との交流があったことがわかる。

開期中に講演会も

この展示は、4月27日より7月末日まで開かれているが、6月10日には公開の講演会も本館研修室で行われる。

午後1時半より、テレビでおなじみになった青森市三内丸山遺跡を中心に東北の縄文文化について、この遺跡発掘を担当した岡田康博氏の講演が行われる。



展示の状況

特別講演会

6月10日(土)午後1時半より
県立考古資料館 研修室

『三内丸山遺跡と 東北の縄文文化』

青森県教育庁三内丸山対策室
主査 岡田康博氏

*電話で早めに下記へ申し込み
ください。

☎ 0238-52-2585

秋の企画展は

「古代山形の役所」

今年度の事業計画決まる

- 今年度の事業計画が次のように決まり、去る4月27日開かれた運営協議会の了承を得た。秋に催される第四回企画展は、「古代山形の役所」のテーマで、律令制下の国の役所である酒田西城輪柵遺跡、陸奥国の国府多賀城などの資料のほかに、置賜郡の郡役所と考えられる高島町小郡山、米沢市大浦、南陽市郡山、川西町道伝など郡の役所の変遷を追って、その移り変りの理由や郡衙の果たした役割、さらにその頃の人々のくらしのようすを考えようとするものである。
- なおその間をぬって、収蔵品展「高島の古墳時代」「置賜地方の古代土器」なども開かれる予定である。
- 主な事業は次の通り。
- 三周年記念特別展「よみがえる縄文文化」 4月27日～7月30日
 - 特別講演会「三内丸山遺跡と東北の縄文文化」 岡田康博氏。6月10日
 - 縄文体験教室 6月18日
 - 土器つくり教室 7月8日
 - 収蔵品展「高島の古墳時代」 8月4日～9月27日
 - 考古学入門講座 8月12日開講。月二回、12月16日閉講。
 - 「縄文月見の宴」 9月下旬
 - 第四回企画展「古代やまがたの役所」 8月4日～11月30日
 - 特別講演会「古代出羽の役所」 小野忍氏、10月7日
 - 収蔵品展「置賜地方の古代土器」 12月6日～4月25日
 - 置賜地域発掘調査報告会 1月27日
 - 縄文手づくり教室 2月25日
 - なお昨年好評で50名の参加申し込みがあった考古学入門講座は、「日本のやきものの歴史」のテーマで、10回にわたって行われる。
- 今年から年二回の館報「うきたむ」の他、手づくりの「うきたむ考古情報」を随時発行して

いる。

「うきたむ考古情報」は、各地の発掘調査、催しものの案内、文献の紹介などを行っている。いま考古ファンにとって、県内の情報不足が悩みであり、新聞発表以外は知られていない現状がある。これをカバーするため、に少しでも役立っていくことを期待している。

「うきたむ考古の会」今年度中に発足

昨年度8月21日から1月22日まで、本館において10回にわたって開かれた「第一期やさしい考古学入門講座」は48名の受講者があり、好評のうちに終了した。

入門講座に参加した受講者・講師を中心に考古学愛好の組織をつくるのが提案され、全員の諒承を得たので、今年の第二期講座の開講を機会に、いよいよ発足の運びとなった。

第二期の入門講座「日本と地域のやきものの歴史」

- 第二期の入門講座は、8月12日から次のような予定で、12月16日まで行われる。
- 1、開講式 土器のはじまり (縄文草創期～早期)
 - 2、縄文土器の発展 (縄文前・中期)
 - 3、縄文土器のおわり (縄文後・晩期)
 - 4、弥生土器の展開 (弥生土器)
 - 5、体験学習 (遺跡見学または縄文土器つくり)
 - 6、古墳時代の土器 (土師器・須恵器)
 - 7、古代の土器
 - 8、中世のやきもの
 - 9、見学実習 (掬粋巧芸館)
 - 10、近世山形のやきもの。閉講式。
- 受講を希望される方は、8月5日まで電話でお申し込み下さい。



第1期入門講座

名称は「うきたむ考古の会」。本館が主催する諸行事に優先的に参加できるとともに、年二回程度の遺跡見学会や学習会などを行う他に、会誌「うきたむ考古」を発刊する予定である。

事務局は本資料館内に置き、年会費は2000円。

すでに「うきたむ考古情報」を四号まで発行し、発会の準備をすすめている。



巨大なロングハウス

— 米沢市一の坂遺跡 —

1989年(平成元)、喜多方へ向う国道121号線から南の小道を入った矢来一丁目の台地から、宅地造成に伴う調査を行っていた米沢市教育委員会のスタッフは、今まで類例がない細長くつづく堅穴の建物跡を掘り出した。その長さ43・2m幅3・85×4・2mの楕円形を引きのばしたような巨大な堅穴で、床はよくふみ固められて

いた。そして壁にそって、内側を向いた柱穴が規則正しく並び、床面の真ん中には6カ所で地面をわずかに掘り込んだだけの炉跡が発見された。

この周辺からは堅穴住居跡やごみ捨ての穴である土壌が見つかっている。このロングハウスの内からは、両端に尖りがある両尖あいくちとよばれる石器や石銚・石匙・石槍・石鏃などの完

成品とともに、たくさんの石器未成品や石屑がおびただしい量出土した。内部から土器の出土は少なかったが、それでも2、3箇復原ができる大形の深鉢が掘り出された。これらからみて約6000年前の縄文前期初頭の遺跡であることがわかる。

ロングハウスの性格がどのようなものであろうか。集団が生活した長屋のようなものであろうか。出土したおびただしい石器や打ち欠く際に生じた剝片、石器製作の原料になる石などが多く掘りだされたことは、この場所ですり製作が行われたことを示している。

炉跡が並んでいたことからしても、冬期間に石器を共同で製作した作業場のようなものではなかったのか。

1992、93年の調査では、その東南の台地から軒を接して並ぶ10棟の方形や長方形の堅穴住居跡が発見され話題をよんだ。まだ輪郭を出しただけで堅穴内部の発掘が行われていないので不明な点が多いが、住居跡が余りに接近しているの、一戸建の独立した住居群とみるよりは、しきりぐらひはあったにしても屋根はつづいていた長屋のようなものではなかったのか。これに対しては「連房式堅穴住居群」



連房式堅穴住居跡

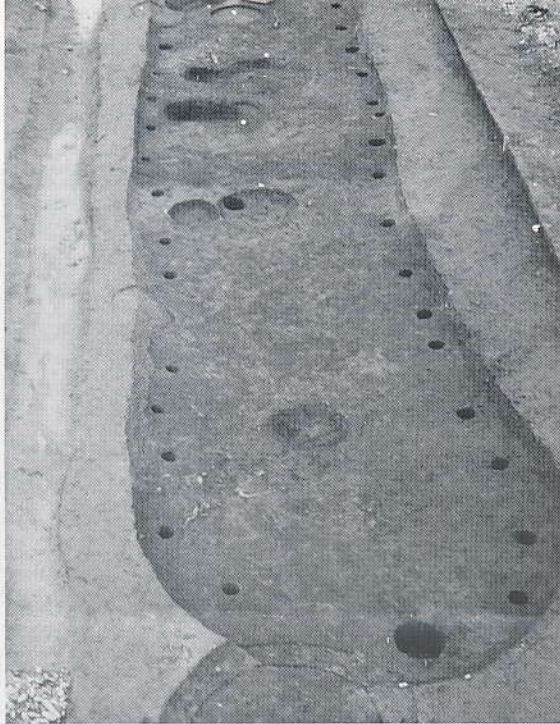
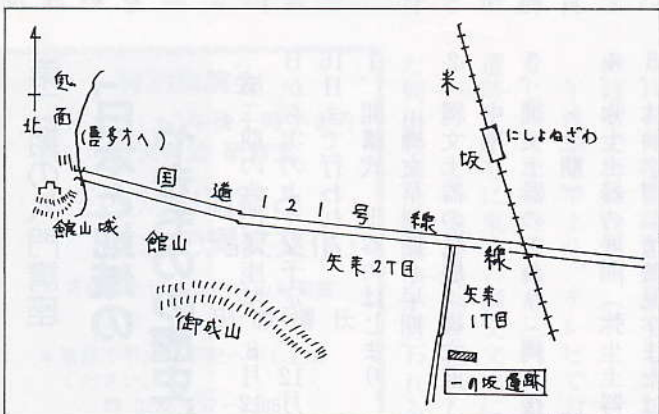
という名称でよばれ、はじめの発見例である。

この謎の堅穴群については、ロングハウスの共同作業場で石器製作に従事した人々の宿舍とみる人もいます。つまり、すでに6000年前に工場とアパートがあったということになるのか。

人々が集まって同じものを製作すれば、能率もよく、いい製品ができることをもうすでに知っていたことになる。

縄文前期は、気候が温暖化し人々の活動や往来も活発になる時期である。この時期に、分業などが一部行

われ、社会組織も複雑になったことを暗示する。いずれにしても、これまでの縄文時代観に転換をせまる遺跡として今後とも注目されていくにちがいない。



一の坂の巨大堅穴